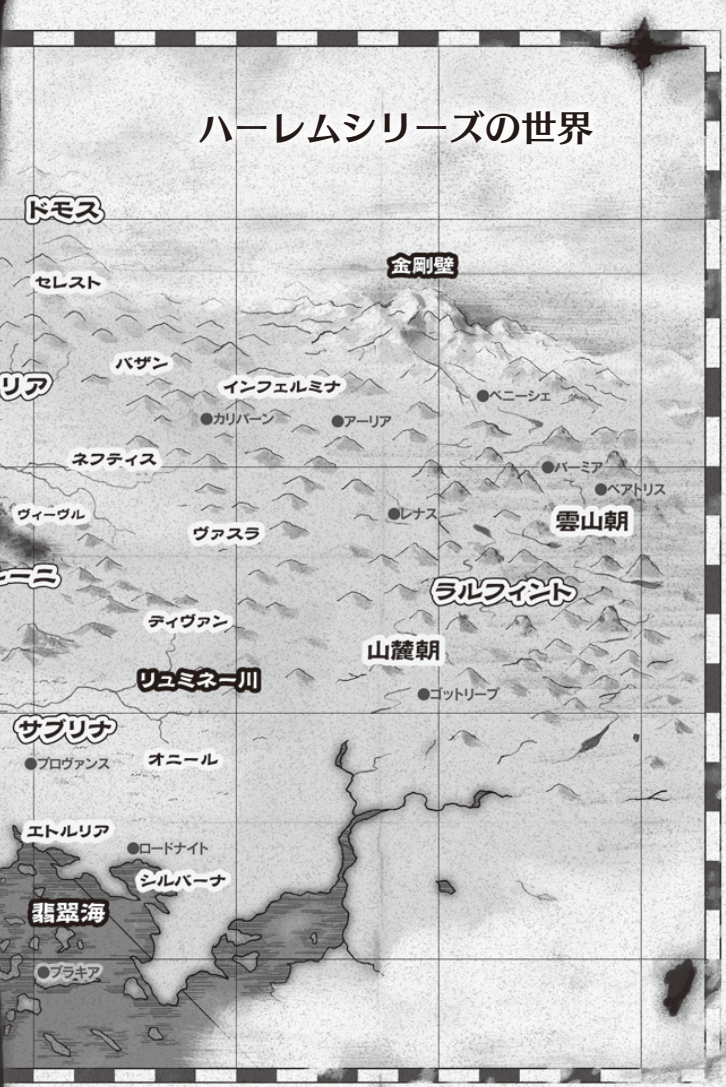
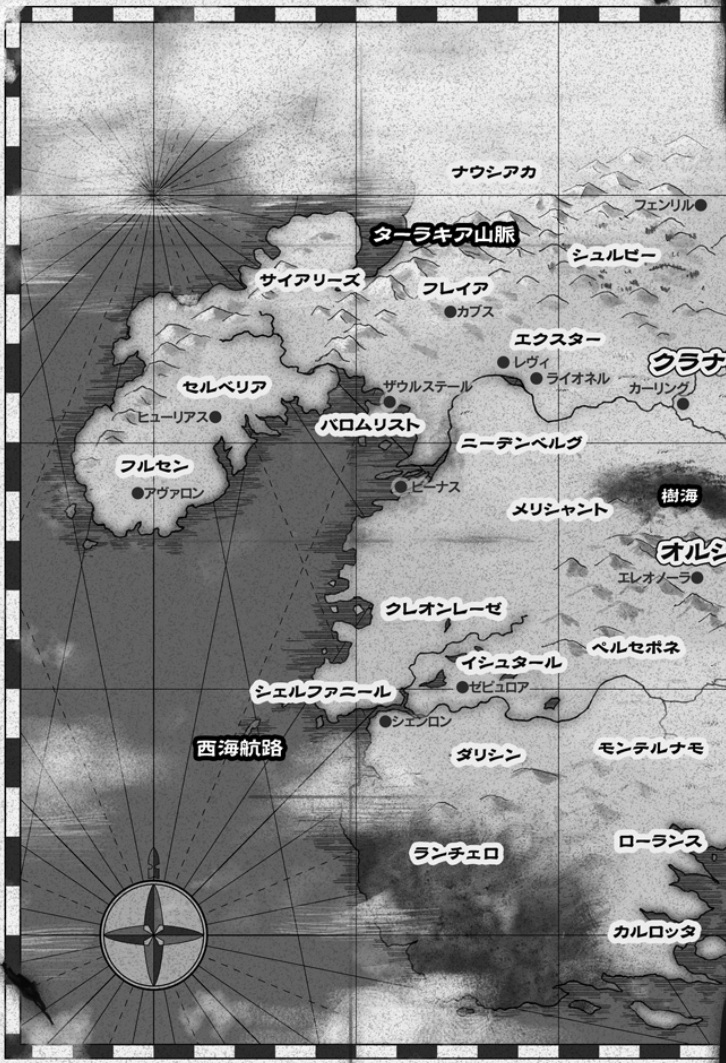
ハーレムダイナスト
Harem Dynast
新・黄金竜を従えた王国
上巻
小説 竹内けん
挿絵 せんばた楼
立ち読み版

ハーレムシリーズの世界




ナウシアカ
フェンリル
ターラキア山脈
シュルビー
サイアリーズ
フレイア
カブス
エクスター
レヴィ
ライオネル
クラナ
カーリング
セルベリア
ザウルステール
ヒューリアス
バロムリスト
ニーテンベルグ
フルセン
アヴァロン
ビーナス
樹海
メリシャント
オルシ
エレオノーラ
クレオンレーゼ
ペルセポネ
イシュタール
ゼビュロア
シェルファニール
シェンロン
西海航路
ダリシン
モンテルナモ
ローランス
ランチェロ
カルロッタ

登場人物紹介

Characters

ロレント

ドモス国王。大陸の統一を目指し他国への侵攻を進める野心家。

アンサンドラ

クラナリア王国第二王女。ドモス国王ロレントに嫁ぎ、ドモス王妃となる。

ルーシー

クラナリア王国大将軍アルバレの娘。アンサンドラの親友。『戦の女神』の異名がある女騎士。

ナジャ

ドモス王国の飛龍部隊長。『ドモスの娘』と呼ばれる、精悍な女将軍。

ドミニク

ロレントの副官。冷徹な女。ロレントに狂的な忠誠心を捧げている。

バージニア

クラナリア王国第一王女。アンサンドラの姉。魔法の天才。

ミミ

アンサンドラのお気に入りの侍女。ルーシーに憧れている。

序　章　蒼穹を舞う翼　010
第一章　我が主君　019
第二章　辺境の王国　061
第三章　覇者の后　086
第四章　見果てぬ夢　135
第五章　婚礼の朝　177
第六章　コールラル平原の合戦　221

嘲笑を浮かべたロレントは、両の乳首を親指と人差し指で挟むと扱き上げていたが、不意に左手を取ると、桃色のロンググローブをむしり取り、中から出てきた手のひらをしげしげと観察する。

「小さな手だ。まさにお人形だな」

手のひらをペロペロと舐めたロレントは、そのまま左腕を頭上へと上げさせた。

そして、晒された無防備な腋の下に顔を突っ込むと、ペロリと舐める。

「はぅ……？」

腋の下を舐められるなどと予想していなかったアンサンドラは、驚いてビクンと震える。

しかし、そんなことは関係なく人食い狼は、子羊の味見を続けた。

「あぁ……、ん？　ああ、そんな……ん……」

腋の下を舐められながら、同時に小さな乳首への丁寧なマッサージを繰り返されたアンサンドラは、自らの意思とは関係なく、口の端から、哀切漂う甘い吐息が漏れだす。

次いで同じように、右の腕も上げさせて、その脇孔を舐め回したロレントが、いつしか硬く充血していた乳首をぎゅっと摘み上げた。

「はぁぁぁ……」

電流を流されたかのようにアンサンドラは、身を震わせた。

「ふっ、いかにクラナリアの姫と権高に構えていても、女は女だな」

嘲りの表情を浮かべた男は、引っ張り上げている乳首とは逆の乳首をパクリと咥えて、

口内でペロペロと舐め回した。
「ひぃ、いや、そんな……」
襲いくる官能にアンサンドラは震え上がる。
ルーシーに襲われたときは、その信頼もあって、嫌ではなかった。ドミニクに悪戯されたときは、屈辱的であった。ロレントも同じ、屈辱に耐えればいいと思っていた。しかし、屈辱の中に、屈服しようとしている自分を感じてアンサンドラは恐怖した。
（この男は怖い。怖いが、それはあらがおうとしているからだ。屈すればいい。身も心もすべて捧げれば、これほど安心できる男はいない）
女としての本能がそう囁いている。その誘惑に乗ろうとしている己の心の動きが怖かったのだ。
アンサンドラの煩悶を知ってか知らずか、ロレントは両の乳首を指で交互に摘み上げ、しゃぶり回した。その愛撫は執拗であった。ルーシーよりも情熱的で力強い。
燃え上がる官能に屈しようとしている自分に恥じらいながらも、肉体の誘惑に抵抗しきれずに甘い声を出してしまう。
「あああ……♪　ああん♪」
チュパチュパチュパチュパ……。
ロレントの乳首遊びが激しくなる。それに伴いアンサンドラは背筋を反らして乳首を翳してしまった。

「ああ、どうして、こんな、わたくし、乳首が、ああ、気持ちいいぃぃぃ、乳首が、気持ちいい……あああ」
熱い吐息を紡ぎだすアンサンドラは、理性にはもやがかかり、何をされているかわからなくなっていた。ただ膣内に淫水が溜まるのを自覚していた。先にドミニクによって点けられていた含み火が、再出火したのかもしれない。
そして、何かが焼き切れた。
「あああぁ!!!」
ビクビクビクビクビクビク……!!!
白い絹肌の美少女の可憐な肢体が激しく痙攣する。
理性が少しの間飛んでいたアンサンドラの視点が戻ると、ロレントの手が優しく頬を撫でてくれていた。
「ふっ、もうイったのか。人形のような顔をして淫らな女だ」
ロレントの指摘にアンサンドラは茫然とする。
(わ、わたくし……乳首だけでイった。イかされてしまった……の?)
無理やり乳首だけで絶頂させられた余韻にアンサンドラが浸っているうちに、ロレントはその投げ出されている両足を抱え上げた。
「まだまだ終わりじゃないぞ。おまえにはたっぷりと楽しんでもらう」
「えっ!?」

ことここに至ったのだ。アンサンドラは犯される予感。いや、覚悟はしていた。
（犯されたからって、心まで汚されるわけではない）
そんな強気な矜持があったのだ。しかし、年上の男の行為は、少女の予想を上回る。
なんとアンサンドラの両足を上げたロレントは、そのタイツをむしり取るや、足の指にしゃぶりついたのだ。
（な、何をしているの……？）
まさか、この覇者気取りの男が、女の足を舐めるなど想像できなかった。
（足を舐めるなんて汚い……）
という意識と同時に、必死に自分の足を舐めしゃぶっている男の姿から、別の感情が湧いてくる。
（この男、わたくしを籠絡しようと、こんな……足を舐めるほどに必死なんだ……。ああ、本気なんだ。本気でわたくしを口説こうとしている）
それと実感させてくれる光景であった。そう感じたとき、汚い足の指を一本一本舐めしゃぶられる恥ずかしさとは違った妙な優越感が、気高い王女の心に滴ってきた。
中原の覇者になりたいという夢は、何も知らぬ子供の見る夢だ。現実が見えてくれば人は諦める。
大陸の列強諸国は戦争を繰り返しているが、それはあくまでも面子を保つためや、ちょっとした財産や領土をかすめ取ろうとしているにすぎない。

それなのにこの男は本気で大陸を武力制圧するつもりなのだ。
（それは多くの血と涙と怨嗟に彩られた道。統一したからといって平和になるものでもないだろう。すぐに分裂するかもしれない）
アンサンドラは子供のころから政治に興味があったから、統一国家というものがいかに無意味か、ということもわかっていた。
そんなことよりも、もっと個々人が幸福で豊かな生活を送れるように努力すべきだと思う。
戦争なんてものは、なんら生産しない。財力と人力の浪費だ。
しかし、そんな馬鹿げた夢が実現できると思い込み、努力している愚か者がここにいる。
自分よりも年上の男。体力も腕力もある。その気になればくびり殺すなんて簡単であろう。そして、事実、幾人もの人を殺してきた危険な男。
それとわかっていて、妙にかわいく思えてきた。
女の足を舐めてまで、実現したい夢。できたら、その夢を叶えてやりたい。
一瞬、とはいえそういう気持ちが芽生えたのは母性本能のなせる業なのだろうか？
しかし、アンサンドラは現実を知っていた。いまのドモス王国の国力では、中原に躍り出るのは自殺行為だ。
二ヶ国を滅ぼし足下に沈めているとはいえ、あくまでも辺境での出来事。中原の大国クラナリア王国とは格が違う。

しかし、確かに、クラナリア王国を恒久的に支配することができれば、その野望は大きく現実味を帯びるであろう。

（そのためにはわたくしの協力は不可避。そう、この男の野望という名の夢は、わたくしの一存にかかっている）

それはかつて感じたことのない愉悦であった。

その悪女的な歓びが少しずつ少しずつ、身を蕩かす中、左右で十本の足を舐めしゃぶり、指の股はもとより、桜貝のような爪の狭間にまで舌を這わせていたロレントは、さらに足の裏に接吻し、踵を通ってくるぶし。さらには脹脛（ふくらはぎ）へと接吻を流す。

（この男はわたくしを愛している……）

それは利害と野心に裏付けられたものだとはいえ、恐ろしいまでの熱情を感じた。女としての、いや、牝としての甘い興奮をかき立てられる。

不意にロレントの右手が、アンサンドラの股間を捉えた。

「あっ」

足を舐められる愉悦に酔っていたアンサンドラは、その不意打ちに抵抗できなかった。

戸惑っているうちに、黄金の陰毛をかきむしられ、さらに肉裂の上に人差し指と中指と薬指を乗せられて、ぴったりと蓋をされてしまった。

「そろそろここが切なかろう」

ニヤリと笑った男は、三指で激しくヴァギナ周辺に圧迫を加えてきた。

「アウン、アフウ、ファーッ、ふぁー……いい……」
恥骨を持ち上げるような手のひらの圧迫は、微妙な強弱がつけられて、アンサンドラに心地よい快楽を与える。
「あっ……あん」
喘ぐアンサンドラの表情を見ながら、ロレントは指戯を調整しているようで、大陰唇の内側の柔肉を、信じられないほどに、優しく、繊細に愛撫した。
そんな、そんな目で見ないで……。下の白目が綺麗に見える三白眼には、女心を狂わす魔力があった。
自分がどんどん深みに嵌まっていっている気がして怖い。
「……あう、あっ……ああ、ああ……」
ピク、ピクピクピク……。
アンサンドラの四肢が激しく痙攣する。
「またイったのか？　ほぉ、愛液が大量に出るな。若いからかな」
惚けた表情のアンサンドラ見下ろしながら、ロレントは濡れ光る右手の指先をペロリと舐めた。
（わ、わたくし、楽しんでしまった。この男の愛撫を……）
かっと顔を熱くしたアンサンドラは顔を背けた。
実はロレントの呟きは、アンサンドラに対してだけではなく、一人悄然としている熟女

にも聞かせるためだろう。ドミニクの柳眉はピクリと明らかな反応を示した。
「さて、そろそろ御開帳といくか」
嗜虐的に笑った男は、恥じ入る乙女の膝の裏を持ち上げると、無様なM字に開かせた。
秘裂が、すべてが晒される形となったアンサンドラは、抵抗するやに思われたが、案に反して抵抗らしい素振りは見られなかった。
生まれながらのお姫様であるアンサンドラは、侍女たちに、すべてを見られて生活しているため、裸を見られることにそれほど抵抗はない。乳首も見られてしまったのだ、ヴァギナやクリトリスを見られても恥ずかしさは同じだった。それに、もっとも恥ずかしい乱れる自分を見られている。
抵抗しないのをいいことに、ロレントは、アンサンドラの秘部をじっくり観察した。
黄金の恥毛は、陰唇を覆うほどもないが、女の蜜によってヌメリ輝き、恥部に貼りついている。
綻んだ淫裂の中にある肉芽と肉襞ともに、綺麗なサーモンピンクだ。小さなクリトリスは、懸命に自己主張するかのように勃起しているが、包皮に入ったまま、まったく顔を覗かせていない。
当然、桜色に窄まった肛門まで見える。
「レズに走っていたというから、もっと発達していると思ったがな」
「一回だけです」

男の感想に、女としての矜持のようなものを刺激されたアンサンドラは硬い声で抗議した。
「別に非難で言ったわけではない。綺麗な花園だ、荒らしがいがあると褒めたのさ」
未発達のクレヴァスに、慎重な愛撫を施す必要を感じたロレントは、アンサンドラの両足を自分の両肩に乗せた。花弁に溜まっていた愛蜜が、肛門の方角に流れ落ちる。しかし、後から後から湧いてきて、まったくなくなる気配はない。
「それにしても、凄い大洪水だな。そんなに俺の逸物が欲しいか」
ロレントの冗談めかした声に、アンサンドラはさっと緊張した。いよいよだ。
「ふふふ、健気だな。かわいいお姫様だ。だが、俺は、このまま挿入するほど性急な男ではない。まだまだ、これからたっぷりと愛撫してやる。痛がる姿を見るのも嫌いじゃないが、おまえは大事な花嫁だ。できるだけ痛くないようにしてやるさ。安心しな」
人の悪い微笑を浮かべたロレントは、左右にぱっくりと割れた陰唇に顔を埋めた。
「ふぅあ……」
荒々しい外見に反して、まずソフトに大陰唇を舐めてきた。
それから触れられているような、触れられていないような感触でたっぷり時間をかけて小陰唇を舐め探る。
触れたとたんに蕩けてしまいそうな、繊細な粘膜の感触をロレントは舌で楽しんだ。ぬらっ、ぬらっと、あたり一面を舐め回す。

「あん、はぅ、はぅ……はぁぅっ」
ビクッと、細い両足が突っ張り、太股が痙攣する。あまりにゆっくりで焦れったささえ感じるクンニであった。
ルーシーの唇でしゃぶられたときは、まるで嵐のような激しさで、自分が自分でなくなるほどの快楽を感じたが、それとは違う。明らかにうまいのだ。
「ヒィ……あん、気持ちいいようぅ、ヒィン、あぁ……わたくし変になりますぅ」
女性器を丹念に下から上に舐め上げられ、アンサンドラは脳が溶解していくのを感じた。本人はそれと意識していないのだろうが、尻を浮かせて、ロレントの舌を追う。
「ふふっ。たっぷり楽しめ。そうでなければ俺がこうやって奉仕してやっているかいがない」
処女姫の素直な反応に小さく笑ったロレントは、さらにねっとりと舌を使う。
二枚の敏感な小陰唇がかき分けられるようにして、ゆっくりと広げ、膣前庭まで進めた。左の小陰唇の内側と、右の小陰唇の内側を、交互に下から上へと舐め削ぎ、さらにはクリトリスの先端まで。
「あ、ああ……ああ……なんで、こんな、気持ちいい……気持ちよくて身体が溶ける……」
愛液の湖となったヴァギナに、舌先を入れてかき回すだけではなく、ときにはタイミングを外しながら、舌先の巧みな動きで誇り高き王女を翻弄した。
さらには秘孔の入り口を、舌先によってくつろがされている。

「もぉだめ、もぉだめ、許して……」
祖国を滅ぼすと宣言した男に、いいように弄ばれている屈辱感は、完全に忘却していた。ただ欲情しきった喘ぎを漏らし、鼻にかかった甘い声で哀願してしまう。何を許してどうして欲しいのか自分でも判然としない。
悶える少女の表情に苦笑したロレントは、さらにまだ細い腰を掴んで、女の最深部に舌先を潜らせる。
「はぅ、はぅ……、ウ、ウッアン」
ぷくぷくと内側から粘膜が盛り上がっているような、秘孔の入り口にも舌先を突き刺し、奥のほうに溜まっている蜜をこね回していたロレントは不意に吸った。
「ずじゅじゅゅゅゅゅ」
アンサンドラが耳を覆いたくなるようないやらしい音を立てて、愛液を啜り上げられる。
「イャャャァァァ……やめてっっっ」
そのあまりにも卑猥な音を聞いたアンサンドラは羞恥のあまり、顔を覆って身悶える。しかし、陵辱者は容赦なく、淫水のスープを啜り飲んだ。
それからいったん顔を上げる。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
惚けた顔をしているアンサンドラの蜜壺は、水のように透明であった愛液の代わりに、絞りたての乳色の愛液に満たされていく。

目の前で始まったお似合いの男女の睦言を見せつけられてドミニクは悔しそうに、それでいて切なげに吐息を漏らした。

怜悧な美貌を嫉妬のあまり青ざめさせ、痩身をガクガク震わせ、薄い下唇を噛み締めている。

ロレントよりも、七つも年上であるドミニクは、ナジャのようにあからさまに嫉妬をぶつけ、求めるにはプライドがありすぎた。どんなに非道なことをされても心で泣きながら、物分かりのいいお姉さんを演じて、なんでも許してしまう。

それゆえに溜まった嫉妬を、アンサンドラに施したように別の女を辱めるということで発散させることが多い。

とはいえ、目の前で好きな男が他の女と睦む、女にとっての拷問のような光景を立て続けに二回も見せられたのだ。

（ああ、わたくしもあのように責めていただきたい……）

嫉妬に悶える熟女の腕はいつしか、ナジャをまさぐるロレントの腕と同じ動きを始めた。

官服の上から巨乳を揉み上げつつ、もう一方の手では、スカートをたくし上げて中に入り、パンティ越しに股間を優しく撫で回す。もちろん、指に触れる乳首は硬く屹立しており、パンティはぐっしょりと濡れそぼっていた。

※

「やーん、焦らしちゃヤ、焦らされるの嫌い、もうちょうだい、入れて、入れて」

長時間の乳房と淫核への愛撫を受けたナジャは、子供のように駄々をこねて哀願してきた。

同じように焦らされても、快楽に必死に耐えるだけであったアンサンドラを思い出し、ロレントは苦笑する。

どちらがいい悪いではなく、この違いが面白いのだ。

「入れてというと、こうか？」

人の悪い笑みを浮かべたロレントは、布越しに肉壺に指を添えると、そのまま突き立てた。ショーツもろともに女壺に中指が入った。

「いやーん」

ナジャは甘い悲鳴を上げて仰け反った。

「はぁ、はぁ、意地悪。もう、陛下ったら～、あたしの中に陛下のオチンチン入れてかき回して、そして、いっぱい、いっぱい、あたしのオマ〇コをザーメンでいっぱいにして……はあはあ」

甘えた声を出したナジャは展望台の手すりに両手をついたまま、左足を天高く突き上げた。

ある意味、犬が立ち木に放尿している姿勢にも似ていたが、美脚がぴんっと伸びていたから、ある種の気品があった。左足と右足が天地を支える一本の柱のように一直線になるようだ。

その股関節の柔らかさといい、バランスのよさといい。並の女にできる姿勢ではなかった。ナジャの身体能力があって初めて可能な挑発である。

ロレントの視界にあらわとなった布のパンツは濡れ濡れで、ボロボロで、シワシワとなっていた。またぐり部分から丘にかけては、削れて、無数の毛玉ができ、薄くなるほどである。

そして、薄布の中央にはしっかりと縦皺が割れ目に食い込んでいる上、中心部ではただ一カ所だけ深く陥没して、染みが酷くなっている。

「まったく仕方ないな」

幼なじみである女勇者の誘惑に屈したロレントは、ガウンを脱ぐ。

中には何も付けておらず、へそまで届かんと反り返った逸物があらわとなる。

期せずして、手すりにしがみつき左足を高く翳したナジャと、一人虚しく自涜に耽るドミニクが生唾を飲む。

ロレントは朱色の股布を引っ張り、パックリと女性器を露出させた。

女の股間に花開く蘭の花びらには蜜がたっぷりとかかって、ヒクヒクと痙攣して男を誘っている。

そこで天高く掲げられた足を左肩に抱え上げながら、ロレントは怒張した逸物を一気に突き刺した。

「ああん♪」

この体位は、いわゆる『立ちかなえ』での脇刺しなのだろうが、それにしては変則的である。

このまま寝たら『菊一文字』と言われる体位になるのだろうが、おそらく名称はない。

立ったままの横位で、『菊一文字』ができる女など一般にいるはずがない。

こういうアクロバティックな体位を楽しめてしまうのがナジャという女の特徴であろう。

もちろん、ドミニクやアンサンドラでは逆立ちしたってマネできない。

「くっ」

横位であるから、膣洞内は横に締まる。

ナジャの膣内は襞が豊富でプリプリしており、さらに締まりが強い。

アンサンドラのように硬くて狭くてきついというのとは違い。純粋に柔らかい筋肉が発達し、男を絞め殺す絶妙な名器になっているのだ。

しかも、この変則的な体位だと、襞の絡み方が普段とは違って、ロレントといえども早々に堕ちそうになる。

「うふふ……」

自分の体内で男が必死に我慢していることを察したナジャは嬉しそうに笑うと、右肘を手すりに乗せたまま、顔を後ろに向け、左腕を伸ばし、ロレントの黒髪を抱いた。

その求めるところを察したロレントは、蟻地獄のような膣穴に逸物を叩き込んだまま上体うつ伏せにして、ナジャの唇を奪った。同時に右手をナジャの下から回して、その右乳

房を揉みながら上体を支えてやる。
そこからキスを流したロレントは、ナジャの左乳首を口に咥えた。
「アアッ……」
その内蔵する精神を表すように、小さいがツンと硬く尖っている乳首を吸い付かれたナジャは、激しい声を上げ、ビクッと反応した。
もう片方の膨らみを手のひらで強く揉み込みながら、次第に硬度を増していく乳首を舌で転がした。
「あーっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」
口内に入り、舌先で舐め回された乳首は、さらにコリコリと硬くなり、唇で挟んでチューチューと強く吸い上げられる。
「あっ、噛んで、噛んで……」
すっかり狂乱の体をなして忙(せわ)しない呼吸を繰り返すナジャの願いを入れて、乳嘴(にゅうし)をカリッと前歯を立てた。
「くぅ……!?」
小さく呻いたナジャは息を詰め、ビクンと肌が硬直する。
同時に膣洞もキュンキュンと締めてきた。どうやら軽くイったようだ。
それと察したロレントは宣言する。
「そろそろ本気でいくぞ」

右手で掬い上げるように右の乳房を揉みながら、左手でナジャの高く掲げられた太腿を掴み、一気に抽送を激しくした。

ガツガツと腰を叩き込んだ。

「あん、もう、あぁぁんっ……」

菊一文字の体位は意外と挿入感覚が深い。極太の逸物で子宮口まで連続して突かれたナジャは口元から涎を噴く。

同時に左の乳房がブルンブルンと揺れた。

一気にトップスピードになったロレントはそれ以後、大きく前後運動し、大きく襞壁をかきまぜ、激しく突き上げる。

こうなっては、もうナジャは獣のメス以外の何者でもなくなっている。声を荒らげて、ロレントの恥骨とナジャの恥骨がぶつかるたびに声は大きくなる。

「ん……ふン、はぁ、……あぁあー……、あうーっ……」

赤毛のポニーテールを振り回しながらナジャは、ときに小さく、ときに大きく、何度となく達した。

「あっ、あぅ、あぁ……、あたし、もぉ……」

ドモスの娘とまで愛される娘は、野生の飛龍の如く、夜空に向かって咆哮を上げ続ける。

「あヒィィィ、あはアアッ……、はぁっう……あひィ……ッ、くひィ……ッ、イク……ッ、イッちゃう、ひイッ……。あああぁッ、あう、はう、あう……。あっ、また、イク、イッ

ちゃう」
理性をなくし、白目を剥いたナジャの顔は「気持ちいい」「もっと責めて」「もう死んじゃう」とごちゃまぜになって、さまざまに変化する。
気が狂うほどに喘ぎのたうつ女の膣内も、激しく収縮を繰り返し、男根を責め上げる。幾度目かの絶頂のとき、ついに男の強靱な克己心も大きな快楽の津浪に屈服した。
「いくぞ！」
力強い宣言とともにロレントは、女体を突き抜けてしまうのではないかというほど激しく肉棒を押しつけた。
「ひぃ……ッ!!!」
どくんッ！　どくんッ！　どくんッ！
子宮口を思いっきり押し持ち上げながらの射精である。
「アアーっ……、あおーん……」
その喉の奥から押し出されるような牝獣の咆哮は、まるで断末魔の鳴き声のように悲しげでありながら、同時に酷く満足げであった。
ロレントは射精の後、動きを少しずつ小さくして、時間をかけてその運動を停止した。
喪心状態のナジャを抱えて、いつまでも放さない。最後の一滴まで放出してペニスが完全に萎んでも、抜こうとはせず、長時間に渡ってナジャの体内に止まった。
やがて、ようやくペニスを引き抜くと、体中の筋肉を弛緩させたナジャは、完全に失神

してしまったかのように、その場にうずくまった。
ショーツは元の形に戻ったが、その中は愛液と精液が混じった凄まじい状態になっていることだろう。

※

「ふぅ……」
満足したロレントは、ナジャがうずくまる塀とは反対側に仁王立ちしたまま石の塀に背を預けた。
そして、激しい嫉妬と泣き出したいほどの切なさを感じている女に向かって顎で指し示した。
「ドミニク……頼む」
たったそれだけで、意図するところが通じてしまうのは、骨の髄まで逸物の奴隷になってしまった女ゆえであろう。
「あ、はいっ」
転がるようにして進み出た三十路の女の顔は、泣き笑いに崩れながらも、輝いていた。
主君の股の間に屈み込んだドミニクは、他の女の愛液で汚れ、すっかり小さくなってしまった逸物を、愛しげに舌を伸ばして舐める。
まるで久しぶりに味わう大好物を、一気に食べてしまってはもったいないと意地汚くちょっとずつ味わう子供のようだ。

ロレントの元傅役ステファンと、アンサンドラの女官長グランマースは、赤面しつつ情事が終わるのを待っていた。
「あっ、あぁいィィィィィィィィ……」
「うおおおおおおおおおお……」
扉越しに、ひときわ大きな女の断末魔と男の咆哮が上がったとき、若い男女の密事は終了したようである。
やれやれ儀式が再開できる、と安堵する老人たちを他所に、華やかな結婚式に参列するために華やかに着飾った女たちが進み出る。
「まったく、陛下ったらしょうがないなぁ」
「ちょっと、注意してきますわ」
ナジャとドミニクは意味ありげに頷きあうと、控室へと入っていった。
「ちょっと、あなたたち何をっ⁉」
女官長グランマースは驚き止めようとしたのだが、その後にさらに着飾った淑女たちが次々と続いた。その中には旧セレスト貴族の娘や、旧シュルビー王家の末席に連なるリュミシャス将軍、さらにはステファンの孫娘リンダの姿まであったので言葉を失う。
ややあって説明を求めるようにステファンの顔をうかがう。
国王の傅役だった老将軍は汗をかきながら言いづらそうに口を開いた。
「すいません。いま入っていたのは……その……殿下のお手つきの女たちですな」

「まぁ……」
言葉を失う女官長が見守る扉の向こうでは、大変な修羅場になっているようだ。
「ちょっと待て、おまえたちぃぃぃぃ！」
珍しく動揺したロレントの悲鳴が室外にまで聞こえてきた。

※

「おまえらな……」
素っ裸に剥かれたロレントは、女たちに包まれて床に大の字になっていた。
その全身には余すところなく、美しい女たちの裸身が取りつき、乳首を舐めたり、腋の下を舐めたり、はたまた豊満な乳房を押しつけたり、濡れた陰唇を擦りつけたりしている。
ロレントの膂力（りょりょく）をもってすれば、女たちなど軽く払えるだろうが、さすがに遠慮しているようだ。
「わたしたちの貞操を散々奪っておいて、いまさら夫婦仲よくしっぽりとなどと許されないのよ」
ロレントの顔をまたいだナジャは、積極的に陰唇を擦りつけている。いわゆる顔面騎乗状態だ。
「美味しい……。殿下のお尻の穴、美味しゅうございます♪」
ドミニクもまた、嫉妬もあらわにロレントのアナルを舐めている。
ロレントとのセックスが一段落したところに、突如現れた美女軍団に夫を押し倒された

アンサンドラは、姿見を背に茫然としていたが、やがて事態を悟って口元に手をやるとクスクスと笑い始めた。
「……陛下ってばかわいい♪」
嫉妬に狂った女たちに責め立てられて辟易しているロレントの姿に、アンサンドラは夫になる男に初めて親近感を持った気がする。
いままで恐怖の覇王のように思っていた。しかし、いくら格好をつけていても、生身の人間なのだということを実感できたのだ。
覇王の后となる決意をした女は、また人間としてのロレントにも魅かれていくのを感じた。思わず身を乗り出して質問する。
「わたくしも参加していいですか？」
「あぁ……好きにしろ」
女たちにかかっては、覇王としての威厳も何もあったものではない。ロレントが投げやりに応じたので、アンサンドラもまた痴女の群れに加わった。
「では、参加させていただきます」
蜜壺から精液を滴らせながら四つん這いになったアンサンドラは、他の多くの女たちに混じって、ロレントのアナルを舐めた。
「……っ」
横に並ばれたドミニクはむっとしたようだが、アンサンドラは素知らぬ顔で一緒になっ

て舐める。
それどころか、ドミニクのテクニックを真似、盗みにかかった。
ピチャピチャピチャ……。
ドミニクとアンサンドラは競うようにして、まるで子猫がミルクを舐めるような熱心さで、男の排泄器官を舐め穿った。
特別に汚いとは思わない。それよりも、夫が気持ちよさそうにピクピクと震えるさまがたまらなく愛しく感じられた。
その感覚は女たち共有のもののようだ。
アンサンドラ以外の女たちも、ナジャにせよ、ドミニクにせよ、他の名も知らぬ女たちにせよ、ロレントを責めながら恍惚とした表情を浮かべている。
世間に畏怖され、恐怖される覇王が、自分の手の中でこんなにも無防備なのだ。
まさに女冥利に尽きる。こういう姿を見ることができるのは寵愛を受けた女だけの特権だ。優越感が女たちの身を甘く蝕む。
「くっ……」
呻き声とともに、野太い逸物がブルリと震えた。
先端からタラタラと先走りの液が垂れ流れている。それはさながら女たちを誘う蜜のようだ。
「はぁ、はぁ、すごい……」

美しく着飾った痴女たちは、皆自らの体内に欲しいと腰をくねらせた。中には奉仕しながら同時に、オナニーを始めてしまった女たちもいる。

おかげで室内にはむっとするほどの牝の臭いが蔓延した。

ロレントの顔面に股間を擦りつけながらナジャが揶揄の言葉を吐く。

「殿下ったらはしたない。いま出したばかりなのに、もうこんなにビックンビックンさせちゃって♪」

「ドロドロのオマ◯コを擦りつけているおまえが言うな」

ロレントの声は意外と余裕のない上擦った声だった。そんな会話を聞きながら熱心にアナルを舐めていたアンサンドラもまた初めての経験に興奮する。

(凄い。袋の中でタマタマが動いている……)

初対面のときから今日まで、セックス漬けの日々を送ってきたアンサンドラだが、基本的に受けばかりであり、自分から積極的に奉仕したことはなかった。

それだけに男の生態に目を見張る。

(かわいい♪　おちんちんってこんなにかわいいんだ)

女としての本能に目覚めたアンサンドラは、慈しむように肉袋越しにチュッと睾丸にキスをすると、そのまま口腔に含んでしまった。

そして、男の急所のプリップリの感触を咀嚼(そしゃく)して楽しむ。

その光景に、ナジャが呆れた声を上げる。

「殿下の思惑通り、この女ずいぶんと淫乱になりましたね」
「あら、旦那様のおちんちんに奉仕するのは、妻の無上の喜びですわ」
「言うようになったわね」
　砂色の瞳がすっと細められる。蒼い瞳も負けじと見上げて、いきり立つ逸物を挟んで視線が火花を散らす。
　そんな生臭い対立をする女たちとは別に、純粋に痴情に狂った女ドミニクが、愛しげに肉棒をさすりながら質問する。
「ロレント様、そろそろお出しになりますか？」
「ああ、頼む。この状況はさすがにつらいぞ。今日はこの後も、行事が目白押しだ。とっとと終わらせてくれ」
　ロレントの答えに、ナジャが機嫌を損ねる。
「あぁ、そうなんだ？　へぇ～あたしたちとこうやって遊ぶよりも政治なんか優先させちゃうんだ」
　嫌みったらしく言ったナジャはぐいっと腰に力を入れた。
「くっ、ちょっと、ちょっと待て、ナジャ、い、息が……」
　どうやら、陰唇によって口と鼻を塞がれたらしい。ロレントは悶え苦しむ。
　覇王を気取る男も、こうなっては形なしであった。
　その両手両足はそれぞれ別の女によって押さえられているし、乳首や腋の下も舐め回さ

れ、快感にのたうつだけだ。
まさに女たちの好き勝手にできる。
楽しくなったアンサンドラは、そっと逸物の裏筋を舐め上げて、亀頭部まで舐めた。
「くあっ……っ！」
王妃を真似て、四方八方からさまざまな女たちの濡れた舌が亀頭部を舐め上げた。
ビクンッビクンッビクンッ……。
（あ、射精しようとしている。これが射精の前触れなのね）
膣内で何度も射精された経験を思い出し、アンサンドラは小股がむずむずした。
（あぁ……欲しい。わたくしの中に……熱い液体をビュウビュウ……）
膣内にまで熱い残滓が残っているアンサンドラだが切実にそう思った。ならば他の女たちの切望はいかばかりであろうか。
股を濡らした淑女たちは、頬を染め、熱い吐息を吐きながら、亀頭部を集中的に舐め回した。
「くぅ！」
男の断末魔の呻き声と同時に、逸物は爆発した。
ドビュビュビュビュビュビュ――――ッ!!!
白い白濁液が、昇竜のように天高く舞い上がった。
その光景を痴女たちは、恍惚として見守ったが、それで終わるはずがない。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円(税込)

全国書店で好評発売中

平凡な少年が女体化! 鬼に狙われた従姉妹を護れ!!

目覚めると従姉妹を護る美少女剣士になっていた

【小説：狩野景／挿絵：天鬼とうり】

全国書店で好評発売中

男の子と女の子——

二つの性の間で揺れ動く
男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!

オトミコ! 僕は男の巫女娘

【小説：大熊狸喜／挿絵：大空一樹】

思春期なアダム5 アウトサイド・ドア

【小説：さかき拳／挿絵：天海雪乃】

全国書店で好評発売中

真夏のキャンプ場で勃発する天使VS魔族VS人間の三つどもえバトル!

既刊LINEUP 全国書店で好評発売中

- ●仙獄学艶戦姫ノブナガ!! ①〜③
- ●ピルグリムメイデン ①〜③
- ●不死の吸血鬼がFSのご主人様を募集しているようです
- ●思春期なアダム ①〜④
- ●呪詛喰らい師【カースイーター】①〜②
- ●女幹部メル様のセカイ征服計画!
- ●借金お嬢クリス ①〜③
- ●無敵の姫騎士がHMに目覚めたようです
- ●宇宙海賊学園ブラックキャット

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ! あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!